

14	岡崎	藤川小学校	タカギ アユミ
		氏名	高木 あゆ美

分科会番号	14	分科会名	特別支援教育
-------	----	------	--------

研究題目

自分の命を自分で守ろうとする子どもの育成

—防災学習の実践を通して—

Ⅰ 研究概要

(1) 主題設定の理由

障がい者と防災をテーマに調べてみると、支援者に対する助言をまとめたものや、障がい者が支援を求めるための手帳の作成など、いくつかの提案を見ることができる。しかし、障がいを抱える人たちが自ら災害に対する耐性をつけるための実践を伝えるものは少ない。災害時、他者からの支援を待つだけでなく、自分の力で困難な場面に立ち向かう力をつけたい、という思いで本主題を設定した。

また、何より私に切実感をもってこの主題へ取り組ませたのは「東日本大震災と被災被害者～高い死亡率の背景に何が～」（藤井克徳）の記事である。その中で東日本大震災の時に障害者手帳所持者の死亡率の方が2倍～4.3倍高かったとの報告がある。障がいゆえに命を落とした人が多くいるという事実から、障がいありきでの避難訓練が必要なのではないか、特性を意識した防災の知識を増やすことが必要なのではないかと考えた。個人差が大きく、実践を繰り返しても耐性が身につく保証はないが、ほんの少しでも災害時に自分の力で乗り越えられる（乗り越えようとする力を出せる）児童を育てたいと考えた。

(2) 目指す子ども像

- ・大地震が起きたときにどのような生活になるのか見通しをもち、災害時に身を守るために必要な行動について考えることができる子ども。
- ・正しい知識をもとに、自らより安全な避難をしようとする心構えをすることができる子ども。
- ・自己の特性理解を深めたり、他者を思いやる視点をもったりすることができる子ども。

(3) 研究仮説と手立て

仮説1

災害時に使用することが予想される物を用意して、実際に使うとともに、自分に合った対策を見つける活動を行うことで、災害時に見通しをもって身を守るために必要な行動を考えることができるだろう。

手立て1 実物を「見る」「触る」「使う」など、体験を重視した活動を取り入れる

- ・校内のさまざまな場所で避難訓練を実施する。
- ・校内にある災害時に備えて準備されているものやホームセンターで売られているグッズを用意し、一人一人が使う機会を取り入れる。

手立て2 自分にとってより快適な方法を見つける場を設定する

- ・災害時であっても、それぞれの特性に合わせた対策が必要であることを意識させ、自分が困らない方法を模索できるようにする。
- ・自分に合う対策を自分で選ぶことができるように、複数の選択肢を知ることができるようにする。

仮説2

体験を通して災害時の避難生活に関する知識を増やし蓄えていくことで、正しい知識をもとにした、より安全な避難をしようとする心構えをすることができるだろう。

手立て1 実物を「見る」「触る」「使う」など、体験を重視した活動を取り入れる

手立て3 絵本の読み聞かせを行い、災害時の避難の仕方について知る

- ・絵本から避難のポイントを押さえ、避難場所をその場で考えながら避難する避難訓練に取り組む。

手立て4 災害ボランティアや市役所の防災課に協力をお願いし、災害時の様子や防災グッズの使い方を聞く

- ・どのような仕組みなのか、どう組み立てるのかなど、子どもたちが知りたいと感じたものに触れ合う充分な時間と質問の機会を設定する。
- ・災害の現場を知っている方に補説を依頼し、現実の場面を想起して体験できるようにする。

仮説3

自他ともに困らないような対策を体験を通して考えることで、自分の特性についての理解を深めることができるだろう。
また、友達も同じように困る場面があることに気づき、他者に対する思いやりの気持ちをもつことができるだろう。

手立て1 実物を「見る」「触る」「使う」など、体験を重視した活動を取り入れる

手立て5 自分の感情を言語化することで自己の特性理解へつなげる

・体験した振り返りをワークシートに書くことで、自分の心の状態を言語化し、自分の特性を意識する機会を設ける。

・気持ちを表す言葉を複数提示し、自分の気持ちに合う言葉を選ぶことができるようにする。

手立て6 学んだことを友達に伝える場を設定する

・友達に自分の得た知識を伝えることで、友達も助けたいという他者への思いをもつことができるようにする。

※手立て1については、仮説1～3の共通の手立てとする。

○単元計画

「ふじかわしょうサバイバル おおじしんをのりこえよう」

学 習 課 題 ・ 学 習 活 動	時	指導の留意点
1 おおじしんがきたら、どうごく ・絵本の内容から、揺れ始めの8秒で安全な場所を見つけ、移動し、体を守ることを知る。 ・実際に8秒で避難する体験をさまざまな場所で行う。	2	・絵本を読み、実際の動きを想起しやすいようにする。 ・恐怖心をあおらないようにし、冷静に考えられるようにする。
2 ぼうさいグッズをみてみよう ・いろいろな種類の防災グッズを見て、大地震が起きたときの状況を想像する。 ・防災倉庫について調べる。	3	・講師（社会福祉協議会）に実物を見せていただき、防災グッズとして準備されていることから、震災時に困ることを考えるようにする。 ・倉庫の中を予想させてから見せ、予想以上に物が準備されていると気付くようにする。
3 トイレはどうなる ・防災グッズの中に簡易トイレがあることから、災害時に使えるのはどんなものか実物を見て知る。	2	・マンホールトイレや凝固剤を使ったトイレなど、災害時に使えるものを紹介し、状況によって種類が変わることを伝える。 ・講師（市役所防災課）が実際に組み立てるところを見せ、使い方をすることで課題にも気が付くようにする。
4 ごはんはどうなる ・いくつか実際に食べてみる。 ・防災食の工夫を知る。 ・自分で用意しておくことも必要だと知る。 ・皿の使い方など食べ方も工夫できることを知る。 ・水は水道からは出ないため、汲んでこないといけないことを知る。	2	・おいしく食べられるものがあると安心できることや、自分の特性に合わせて準備する必要があることに気付くようにする。 ・長い賞味期限や簡単な調理法など、工夫されていることに気付くようにする。 ・仮の給水所から水を汲んできて調理に使う体験を取り入れる。
5 ねるところはどうなる ・体育館に実際に寝てみて、布団の上で寝るときとは違い、快適には寝られないことを知る。 ・2㎡の広さを提示し、ひと家族が過ごすには狭いことを体験し、その中でどんな工夫ができるか考える。 ・暑さ、寒さの対策も必要なことを実感する。	1	・与えられた仕切りの中に入り、そこで過ごしてみることで、快適には過ごせないと実感できるようにする。 ・被害の状況によっては、体育館で何日も寝泊りすることになることを知る。
6 こころはどうなる ・自分の心の状態に着目する。 ・避難所を再現したスペースに寝てみて、精神的な状態にも配慮が必要になることを実感する。 ・保護者のアンケートから、心の状態も心配していることを知る。 ・学校で地震が起きた場合は、友達と協力することもできることを想定し、自分たちがより安心して過ごす工夫を考える。 ・家族と集合場所などを決めておくことも、安心につながることを知る。	2	・自分の体だけでなく、心の状態にも着目して対策を考えるようにする。 ・保護者の思いを伝え、自己理解を深めながら必要な準備を考えるようにする。 ・友達同士や家族でどんなことができるのか、具体的に想像できるように例を用意しておく。 ・家庭で決めておくことよい事項をワークシートにまとめ、保護者と話し合って作成できるようにする。
7 ここからどうする ・学習した内容から考えたアイデアを社会福祉協議会へ伝えたり、校内の防災意識が高まるような活動（ポスターや動画制作、放送での呼びかけなど）をしたりする。 ・地震が起きたときの動きの確認、家庭でできる防災について呼びかける。	2	・これまで学習した内容から、家族や友達に知ってほしいことを伝える方法を考える時間を設ける。 ・できる範囲で自分たちが考えた啓蒙活動ができるようにする。

○児童の実態と目標

児童	児童の実態	単元目標
A 6 年	・イレギュラーなことにパニックを起こしやすい。 ・算数など決められたルールに則って繰り返す活動を好み、ルールが明確なものは継続して取り組むことができる。 ・集団の中に入ることや人とコミュニケーションを取ることが極端に苦手である。	・災害時に自分が困りそうな場面を具体的に想像することができる。 ・体験を繰り返すことで、実際に起きたときに少しでも落ち着いて行動する心構えをもつことができる。
B 4 年	・明るく活発で、集団の中でも楽しく過ごすことができ、人と関わることを好む。 ・聴覚過敏があり、大きな声や音に抵抗があったり、たくさんの人が話す場面で集中することが難しかったりする。 ・自分本位に行動してしまい周囲の人を困らせることがある。	・発想力豊かな面を生かし、災害時に気持ちが明るくなるようなアイデアを出したり自分ができることを考えたりする。 ・思いやりの視点をもって自分ができることを見つけることができる。
C 1 年	・自分の快・不快を知らないことが多く、やってみて気づき、対応に困っている姿がある。 ・計算問題が好きで発展的な計算にも意欲的に取り組める。 ・読字に苦手があり、ゆっくりならひらがなが読める。 ・一斉の指示では話を聞いていなかったり理解できなかったりすることがあり、個別の説明が必要なことが多い。	・災害に対する知識を増やすことで、災害時に、より安全な避難方法を考える力をつける。 ・体験を通して、実際に起きたときのことを具体的に想像し、自分事として考えることができる。

2 実践

(1) 絵本の読み聞かせと避難訓練(手立て1・3)

本校では各学期に必ず避難訓練に取り組んでいる。しかしながら、発達に特性をもつ子どもの中には、一つのパターン練習から汎用性をもたせて捉えることが難しい子どももいる。そこで校内の様々な場所で避難訓練を行うことにした。避難の仕方の指標となる絵本「おおじしん さがして、はして、まもるんだ」(清水奈穂 岩崎書店)【資料1】の読み聞かせを行い、揺れ始めの8秒でうさぎのポーズで逃げる場所を探し、ねずみのポーズで走り、かめのポーズで身を守ることを意識させてから取り組んだ。学校を練り歩き、教師が「地震だ!パン!」と合図を出したら自分たちで考え、その場で一番安全だと思う場所へ避難する訓練を繰り返した。トイレ、廊下、階段、特別教室、体育館などいつもは訓練をしない場所でも行い、どこがより安全なのか振り返った。各実践場所で避難する場所を特定してしまうと、それがこだわりになってしまい、実際に地震が起きたときに安全ではないにもかかわらずそこを目指してしまう可能性もあるため、「正解はここ」と断言することは避け、避難の仕方が正しいかどうかを子どもたちと検証した。かめの姿勢で自分の体の大事な部分(頭や首)が守れたかどうかを確認した。動くものは手で押さえていないと動くので危ないことを意識して避難訓練を行ったため、動くものがたくさんあることに気付いたり自分のいる場所に応じて一番安全だと思う場所を見つけることが大切であるという意識をもったりすることができた。



【資料1】使用した絵本

完全に安全な場所はないという気付き

【資料2】完全に安全な場所はないという気付き

【資料2】このことから、正しい知識をもとにして、安全に避難しようとする心構えをもつことができるようになったと言える。

(2) 災害ボランティアの方を招いて(手立て1・4)

災害ボランティアセンターから講師をお招きし、震災現場の写真や使われている防災グッズを紹介した。講師の経験をもとに、震災直後の様子を聞いたり、日常の生活を送ることができないと分かる写真を見せたりし、具体的にイメージできるようにした。提示する写真は事前に相談し、落ち着いて向き合えるようなものを厳選した。その後、防災グッズを並べ自由に見たり触ったりする時間を確保した。【写真1】防災グッズについては、先に説明をせずに自由に触れさせることで、なぜ防災グッズの中に絵本やぬいぐるみまで入っているのかと、子どもたちから問いが出せるようにしたところ、【資料3】に見られるように、想定外の物が入っていたことに気づき、興味をもつ姿があった。写真とともに防災グッズについての話を聞くことで、災害時に困るであろう場面を具体的に想像することができた。100円ショップで売られている物も多数あることを聞き、おうちの人と買いに行きたいという声も聞かれた。正しい知識をもとに、見通しをもって災害に備えようとする心構えができたと言える。



【写真1】防災グッズとのお出合い



【資料3】防災グッズを見て

校内にある防災倉庫についても実際に中を見て確認し、粉ミルクや車椅子、緊急時に設置できる電話などがあり、避難所のイメージがより具体的になった。太陽光パネルが取り付けられていることに気づき、

発電機もあった、と感激している様子が見られた。発電機があれば充電できるからゲームができるのではないかと生活経験に基づいた発想をする場面も見られた。子どもたちの心のよりどころとも言えるゲームは、状況によってうまく活用すればよいという話を災害ボランティアの方からも聞いている。防災倉庫の見学から、避難所には赤ちゃんから高齢者まで多くの人が集まるということ、発電機も備えられてはいるが自分たちが優先的に使えるわけではないことなど、具体的な場面を想像しながら避難時の心構えをすることができたと言える。

(3) 市役所 防災課から講師を招いて(手立て1・4)

たくさんの防災グッズの中から、災害時に一番困ると思われるトイレから体験に取り組んだ。災害の状況や避難している場所によって対応が違うため、マンホールトイレと凝固剤で固めるタイプのトイレのどちらも体験させることにした。マンホールトイレは市役所の防災課から講師をお呼びし、実際に藤川小が避難所になった場合に使うマンホールでトイレを設置した。マンホールの蓋を開けるところから一緒に行き【写真2】、子どもたちも設置の手順をある程度理解することができた。設置の段階から体験したことで、災害時、子どもたちがマンホールトイレの設置のために手助けできる場面があるかもしれない。実際に使う場面での心理的な抵抗が少しでも低下するように、設置後一人ずつ実際に座る体験を行った。複数の児童が何度も市役所の方に質問する姿があり、自分事として関心を高めている様子が見られた。正しい知識をもとに、マンホールトイレの使う場面の見通しと心構えをもつことができた。

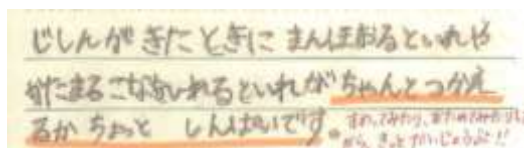


【写真2】 マンホールトイレを組み立てる様子

自宅で避難生活をする場合は、各家庭で凝固剤を用いて処理をすることが推奨されているため、そちらのタイプでの体験も行った。【写真3】社会福祉協議会の方に協力いただき、ポータブルトイレにビニール袋をかけ、一人ずつ座る体験を行った。また、各自ビニール袋に尿を見立てた水を入れ、凝固剤を入れて固め、袋の口を縛り、ごみとして出すところまで体験した。袋は二重にすると臭いのものがなくてよいことも聞き、実際に使う場面での知識を増やすことができた。体験後Cは、本当に地震がきたときに自分にできるのかどうか不安に



【写真3】 凝固剤を用いたトイレについて学ぶ様子



【資料4】 C 体験後の気持ち

感じていることを感想に書いていた。【資料4】体験したことで不安も感じてはいたが、具体的な見通しをもてたからこそ感じられた正当な不安であり、災害時に対する心構えをもつことができたと言える。今後、家庭のトイレで実物を使って試すなど、さらに体験を繰り返すことで不安を減らせるかもしれない。

(4) 自分の特性に合わせた防災を考える(手立て1・2)

特性から味覚過敏を持ち合わせている子どもも多いため、市販されている防災食が食べられるのか試食会を行って確かめた。【写真4】試食後、ワークシートにすぐ記録できるようにし、「たべられる・がまんすればたべられる・たべられない」の3項目から選択することで自分の食に関する理解を深められるようにした。Aは「たべられない・がまんすればたべられる」の選択が多かったが、わかめごはんのおにぎりはおいしく食べられることが分かり、買いに行き置いておきたいと話した場面も見られた。【資料5】試食会には保護者も参加し、親子で災害時の食に対する理解を深める機会とした。保護者からは、どこで手に入るのかなどの問い合わせがあり、親子で災害時の食に関する関心を高め、特性を意識した対策を考えることができたと言える。また、防災食を作る体験も取り入れ、耐熱のビニール袋でプリン作りを行った。洗い物を出さずに簡単に調理することができ、子どもたちも驚いていた。災害時に食を通してほっとする時間を確保することも大切だと体験を通して感じるこ



【写真4】 防災食の試食

害の状況によっては、自宅で過ごすことができなくなることも考えられる。災害時、発達に特性を抱える人たちが避難所の環境に耐えられず車中泊を選択せざるを得なかったという記事を多く目にした。不特定多数の人と自由度の少ない避難所で寝なければならぬかもしれないということ、その中でも自分たちでできる工夫があることを知るため、実際に避難所で活動した経験を聞くと共に体験活動を行った。まずは体育館にブルーシートを敷き、寝てみる。床の硬い感覚、暑さ寒さに耐えなくてはならないことを体験した。カーペットを足す、段ボールを敷く、マットを敷く、寝袋を使うなど、様々な感触の物を敷いて寝る体験を行った。それぞれに快適な寝心地のものを探し、意外と段ボールが良かった、いろいろな素材を重ね



【資料5】 A 試食時のワークシート

て敷くと寝ても痛くなくなったなど、体験から得られた感想が聞かれた。児童Cは、災害時に学校の体育館が避難所となる可能性があることを知り、もっとふわふわな布団で快適に寝たいという思いをもった。また、マットを重ねて高さを出すことで、足の不自由な方に配慮することができることを紹介していただいた。【写真5】避難所には体の不自由な方が来ることも考えられ、自分のことだけでなく周りの人への配慮も考えることができるとよいと学ぶことができた。自分にとっての快適さを追究し、自覚できたことで、見通しをもって災害時の対策を考えることができたと言える。



【写真5】足の不自由な人に対する配慮

(5) 心を守る(手立て1・5)

命を維持するために必要な活動を一通り体験した後、「もういつ地震が来ても大丈夫だね。」と念押ししてみると、子どもたちは自信満々に「もう大丈夫!」と返事をしていった。防災学習に取り組む際に、保護者へのアンケートを行ったところ、災害時に心配に思うこととして回答が多かったのは、子どもたちの心の状態についてだった。この結果をもとに、心がどうなるかも想像しておく必要があることを伝え、教室に避難所を再現して体験を行った。

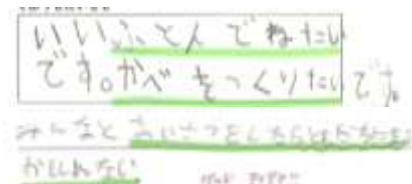


【写真6】避難所の体験

【写真6】職員が座ったり、育休中の職員が赤ちゃんを連れて参加したりし、可能な限りリ
アリティを追究して避難所を再現した。体験したときの
気持ちを言語化しやすいよう、快・不快の気持ちを表す
言葉を提示し、寝転がった時の気持ちを発表した。普
段、自分の気持ちに気付かないことの多いCも、自分は



【資料6】Cの気付き



【資料7】CとBの振り返りより

人がたくさんいるところが苦手だということに気付くことができた。【資料6】AとCは、親しくない人がたくさんいることが不快で困るという意見だったが、帰宅後に1人で過ごすことの多いBは、多くの人と一緒にいられることで安心につながるという意見だった。それぞれに感じ方があり、自分と同じ人ばかりではないことを知ることができた。人がたくさんいて不快に感じる場合にできる工夫として、簡易的に壁を作って自分の空間を確保するという案、気持ちを落ち着かせることのできるおもちゃや本などを用意しておくという案が出た。大勢の人と同じ空間で過ごすことが苦

手だという特性を意識して、自分に合った対策を取ろうとする心構えをもつことができたと言える。また、多くの人と安心して過ごすための工夫として、知らない人にも挨拶をする、一緒に遊んで仲良くなるなどのアイデアが出た。Bは人と積極的に関わり、互いの関係性を深めることで安心を得ようと、他者へ働きかけるアイデアを出すことができた。Bの意見を聞いた子どもたちは、自分にはできないかもしれないけれど、そういう方法もあるんだということを学ぶことができた。災害時、困っている他者に対して思いやりの気持ちをもって関わろうという気持ちを持つことができるのではないだろうか。【資料7】に見られるように、それぞれの感じ方に合わせて対策を考えており、自分の特性の理解を深めることができたと言える。他者と関わろうとする意見も多く出されたが、相手の気持ちを思いやって関わるというところまでは子どもたちの考えが充分には及ばなかった。

(6) みんなで助かるために(手立て6)

学習を積み重ねる中で、家の人や友達に教えたいという思いをワークシートに書く子どもが多く見られた。そこで、どのように伝えたいか話し合い、動画が動きを伝えやすいことから、それぞれが友達に知ってほしいと思う防災の知識を動画でまとめることにした。Aは、人前で話すことに大きな抵抗を感じ、朝の会の司会も取り組めずにいる。そのAが伝えたいと思ったのは防災倉庫についてだった。防災倉庫の中の様子を撮った写真から紹介したいものを選び、ナレーションも教師と一緒に考えながら繰り返し練習した。自分の顔を動画に出すことはできなかったが、選んだ写真について自分の声で説明を加えた動画を作成することができた。音声のみの出演とはいえ、全校児童に向けて動画を作成し、パニックになることなくその動画をみんなと視聴できたことは、とても大きな一歩である。これはAが学習を積み重ね、心から伝えたいという気持ちになれた証だと言える。Bは人との関わりが得意なこともあり、避難所で過ごすときに周囲の人と仲良くなるのが大切だという主旨の動画を作成した。【写真7】災害時に子どもでもできることがある、というメッセージを力強く伝えた。Cは災害時のトイレについて、使い方を具体的に伝える動画を作成した。ビニールは2枚重ねることや、粉を入れてからしっかり縛ることなど、友達と実演を交えて説明した。実際に使えるか不安に感じたCだからこそ、トイレの動画を作成して友達にもトイレのことを伝えたいのだと考えられる。分かりやすく伝えようと何度も撮り直したり、見返したりしてよりよいものを作ろうとする姿が見られた。他者への思い、というところまでは見取ることができなかったが、伝えたいという意欲を高めて活動に取り組むことができた。



【写真7】避難所で快適に過ごすための提案の動画の一場面

3 仮説の検証

(1) 仮説1について

手立て1を共通の手立てとして設定したことで、子どもたちは体験をもとに実際の場面を想定しながら学習を進めることができた。特性のある子どもたちにとって想定上のことを考えることは難しいため、体験を通して学びを積み重ねたことが、災害時の自分を具体的に想起させることにとても有効であった。実際に災害が起き、子どもたちが被災時に使われている物を見たとき、これらの体験の場面が頭に浮かび、何らかの形で避難生活に生かすことができるのではないだろうか。

手立て2の自分にとっての「快」を求めることを意識したことで、子どもたちが自分に合った対策を考えることができた。一人一人、快・不快には差があることを意図的に意識させ、自分で自分の特性を踏まえた身を守る方法の具体的な見通しをもつことができた。

これらのことにより、手立て1や手立て2は、災害時に見通しをもって身を守るために必要な行動を考えることができる子どもの育成にとっても有効であった。したがって、仮説1の妥当性は証明されたと考える。

(2) 仮説2について

手立て3の絵本の読み聞かせを取り入れたことで、子どもたちが構えることなく学習をスタートすることができた。絵本の内容から、同じように避難訓練を繰り返すことで、いつでも同じポイントに立ち返り、本当によりよい避難ができているのか、共通の認識をもとに振り返ることができた。また、訓練を繰り返すことで避難するときに考えるべきポイントを何度も復習でき、正しい知識をもとにその場の状況から自分で判断して避難する場所を選択しなければならないという意識が子どもたちの中に根付いた。

手立て4の専門的な知識や経験が豊富な講師の協力を得たことで、一般的な知識や経験で説明するには足りない部分を補うことができた。本やインターネットでは得られない、実際に現場へ行かれた経験があるからこそその情報が、子どもたちに熱をもって伝わり、防災学習の必要性を切実に感じさせた。災害現場の写真1枚とっても、その場の緊迫した雰囲気、そこにいた人たちの厳しい状況など、そこにいなければ分かりえない話を聞くことができ、子どもたちの新たな気づきにつながった。また、繰り返し質問をする子どもたちに対し、ささいな疑問に対しても納得するまで何度も説明を重ねることで、子どもたちの知的好奇心が満足する姿が見られた。

これらのことにより、手立て3や手立て4は、災害時に助けとなる知識を増やし、蓄えることで、正しい知識をもとにより安全に避難しようとする心構えをすることができる子どもの育成にとっても効果的であった。したがって、仮説2の妥当性を確認することができた。

(3) 仮説3について

手立て5の自分の感情を言語化することで自己の特性理解へつなげる取り組みは、発達年齢によって、有効であったりなかったりしたと考えられる。言語化することにより、自分の感情に改めて気づき、そこから自分の特性へと気づきを広げられたらと期待したが、そこまでたどり着くには、こちらからの言葉かけによる確認が必要だった。Cは、人が多いのは嫌だとワークシートに記入したが、それはその一時的感情であったというような理解に留まり、自分は人の多いところが苦手だという汎用性のある気づきには至らなかった。Aは、生活経験から、自分は人が多いところが苦手だという自分の特性を踏まえており、そのことを考慮して避難所で過ごすときにはパーテーションを立てたいと自分の特性に合わせた対策を考えることができていた。特性の理解は生活経験を重ねた上で実感できるものであり、学習の一端としての扱いではなかなか結び付かないものであることを改めて感じた。

手立て6の伝える場の設定をしたことで、他者へ意識を向けることはできた。自分たちが得た新たな知識を周囲の人に伝えたいと強く訴える姿も見られ、意欲的に動画の作成に取り組んだ。ただそこに他者を思いやる気持ちがあったかという点、そこまでは言い切れない部分があった。自分が困ることを追究することは意図的に取り入れたが、その中で他者の理解までは至らなかったためだと考えられる。人との関わりが得意なBは、知らない人と壁を作るのではなく、仲良くなることで精神的な距離を縮め、快適に過ごせるようにしたいという思いをもっていた。伝える場でも、仲良くなるにはどうするか、困っている友達へどう配慮ができるかという視点で自分の考えを呼びかけていた。Bにとっては有効な手立てだったと言える。

これらのことにより、手立て5や手立て6は、一部の児童には有効だったと言えるが、全体への手立てとしては不十分であった。したがって、仮説3の妥当性は立証されなかったが、手立ての有効性は検証できた。

4 今後の課題

本実践に取り組んだことで、災害への備えのほんの少しの部分ではあるが、子どもたちが実際の現場で生かせる知識を記憶の中に残すことができたのではないと思う。しかし、継続的に繰り返し取り組むこと、それぞれの成長段階に応じて課題を設定することなど今後につなげるべき問題点も多数実感した実践でもあった。子ども一人一人の特性理解と災害対策の両立を図ることは難しいことであるが、子どもたちが自分の「快」に気づき、少しでも苦痛を減らして過ごす方法を一緒に見つけられるよう挑戦し続けたい。

